子ども図書館　大日本図書

黒い塔のひみつ

ズデニエック・K・スラビイ　金山美莎子訳　瀬川康男画

《訳者紹介》

金山美莎子（かなやま みさこ）

1961年，日本女子大学児童学科卒業。1969年3月まで，東京都新宿区立津久戸幼稚園に勤務し，保育問題研究会文学部会に所属。プラハ在住。

《画家紹介》

瀬川康男（せがわ やすお）

1932～

愛知県生まれ。日本画，洋画を学び，現在，イラストレーターとして，第一線で活躍中。1967年，「ふしぎなたけのこ」（松野正子 文・福音館書店）で，第1回世界絵本原画展（ブラチスラバ・ビエンナーレ）の最高賞グランプリを獲得。おもな絵本に，「三にんむすこ」（渡辺茂男 文・福音館書店），「わにがまちにやってきた」（チュコフスキー 文・岩波書店） などがある。日本イラストレイター会議会員。

NDC. 989

黒い塔のひみつ

ズデニエック・K・スラビイ

Z. K. Slabý

金山美莎子訳

初版 1971年 大日本図書

137p. 22cm

小学校中学年向

子ども図書館

1971年1月25日 初版発行
1972年6月15日 第3版発行

著者 ズデニエック・K・スラビイ／訳者 金山美莎子／発行者 佐久間裕三／発行所 大日本図書 東京都中央区銀座1-9-10 〈〒〉104 東京（03）561－8671～9 振替 東京219番／印刷 株式会社 金羊社／製本 岸田製本

黒い塔のひみつ 8397-217355-4398

黒い塔のひみつ

ズデニエック・K・スラビイ　金山美莎子訳
瀬川康男画

子ども図書館——大日本図書

黒い塔のひみつ

黒い塔のひみつ・5
1 馬になったペピーク・18
2 オンドジェイとボール・32
3 長い足のうそばあさん・48
4 知っているのはだれ？・63
5 いたずら雪だるまダリボル・73
6 ピアノの国・85
7 あばれだした電子頭脳・95
8 お話のうちのネオンくん・109
大きな黒い本の小さなあとがき・133
スラビイさんについて＝鳥越　信・135

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

黒い塔のひみつ

ある美しい町に、たくさんの子どもたちが住んでいました。

ペトル、ニナ、カルリーク、ホンザ、マルケトカ、ダーシャ、ズザンカ、モニカ、マジエンカ、レダ、リボル、シチェパーシカ、イワンカ、インドラ、フランタ、バシェク、ペピーク、ミハル、カーチャ、パベル、アルジベトカ、カルリチカ、ズデニェック、リーダ、ボリス、ヤナ、ダナ、ハナ、アンナ、エルビク、ボホウシ、イルカ、アレナ、ヘレナ、ミラン、ルージェンカ……まだまだ、とてもかぞえきれないほどたくさんです。

その町には、像がたくさんある大きな広場があって、いつでもハトがいっぱいむらがっていました。

あなたはきっと、「わたしたちの町にも、像はないけれど、小さな広場があって、いつもスズメがいっぱい飛んでいて、そのうえ、おおぜいの子どものなかには、スピチクニェフなんていうめずらしい名まえの子どもまでいるんだ。」っていいたいんでしょう？

なるほど――そんなめずらしい名まえの子どもは、このお話の町にはいないかもしれません。けれど、そんなことは、どうでもいいんです。このお話の町には、もっともっとめずらしいことがあるんですもの。

どんなことか知りたいんでしょ？

この町には黒い塔があるんです。

「プラハやブルノにだっていろいろな塔がたくさんあるのに、たった一つの塔をじまんする気なの？」なんていわないで、まあ聞いてください。

黒い塔は、町のまんなかの、あの大きな広場のすぐそばにたっていました。

ちかくにはバスの停留所があって、まわりには大小さまざまな自動車や、カメラや八ミリ映写機で塔をうつしにくる旅行者たちでにぎわっていました。ナイロンブラウスにテトロンスカートの若い娘たちは、まるで石でクルミをわるときのように、コツコツとハイヒールの音をひびかせて塔のまわりを歩いているし、若者たちはトランジスター・ラジオを鳴らしていました。ちかくのきっさ店からは、チャールストンやツイストのメロディーがにぎやかに聞こえていました。

けれども、古ぼけた黒い塔は、じっと、なぞをひめてたっていました。まるで、しばいの舞台か、おとぎ話の魔術師のすみかのようです。きっと、この黒い塔は、王女を食べたりゆうと戦った若者や戦士やゆうれいやばけものやカッパやペテン師たちが住んでいた大むかしから、ここにたっていたのでしょう。

信じられますか？
黒い塔はだまっています。じっとなぞにつつまれてたっています。塔のなかはからっぽみたいです。
ほんとうかしら？
ときどき、この塔からあやしげな物音が聞こえてくることがあるようですよ。――でも、それはきっと、コウモリの羽音でしょう。
では、この小さな物音は？――きっと、クモが虫をつかまえるあみをつくっているのでしょう。
じゃあ、あの夜のわらい声は？――たぶん、ホーホーと鳴くフクロウの声でしょう。
わたしは、長いあいだ、このかざり気のない黒い塔は、くらくさびしい塔なのだと思っていました。
ところがある日、わたしのところへ、ペトルが息をきらしてやってきました。そして、いきなり、「あの人をみた？」と聞きました。
わたしが、「だれのこと？」とたずねるのもまたずに、ペトルはいそいでいいました。
「ぼく、バスの停留所に立ってたの。ぼく、おかあさんをまってたんだ。ぼくがそこでまっていたら、あの黒い塔のとびらがあいて、女の人がでてきたんだよ。おばさん――じゃないなあ。ちょっとおねえさんみたいで、ちょっとおばさんみたいで、ちょっと妖精みたいな人、わかる？」

「ペトル！」と、わたしはたしなめました。わたしはペトルがときどきいたずらっぽくうそをつくのを知っていましたから。

けれど、ペトルは大まじめな顔つきで、「ほんとうだよ。」と、しきりにいいました。

「ぼく、この目でみたんだ。

その人、白バラのようなはだだった。

あめ色の髪につばの広いぼうしをかぶっていた。

まるで、羽のようなむらさき色のきものをきて、

手に、銀のかざりのある小さな黒い棒をもっていたんだ。

ぼく、よーくみたんだよ。」

「古い建物の案内人かなにかだったんじゃないかい？」

わたしも案内人のはずはないと思いましたが、だまっているわけにもいかないので、そういいました。

「じゃあ、建物の案内人が、棒をまわしてきえることができる？」と、ペトルは聞きました。

「どんなふうにきえたんだい？」

「ぜんぶきえちゃった。空気のようにきえちゃった。わかる？」

「空気のようにきえただって？」

わたしは信じられませんでした。

「ぼくがみていることに気がついたら、きゅうに棒をまわしてきえちゃった。まるで、霧がはれるように。ぼくは黒い塔にいって、とびらをあけようとしたけど、あかなかった。その人、かぎをかけたりしなかったの、ぼくちゃんとみてたんだ。」

わたしは、ペトルがうそをついているかいないかは、すぐわかります。

だから、わたしは塔のところで、十日十夜まちかまえていました。ペトルは、わたしがおなかをすかせて死なないように、ソーセージや白パンやチーズのサンドイッチやレモネードなどをはこんでくれました。わたしはミイラのように、じっとそこに立って、黒い塔から目をはなしませんでした。

しっぱいでした。

とびらは、十日十夜しまったままで、人っこひとりはいりもしなければでてきもしませんでした。わたしには、どうしても、いそぎのしごとがありましたから、もうこれいじょうまっているわけにはいかず、帰ってきました。

けれど、十一日めにニナがやってきて、またあの少女にあった話をしました。とつぜん黒い塔のとびらがあいて、あのおねえさんのような、妖精のような少女がでてきたというのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ニナはいいました。
「白いスイレンのようなはだだったわ。
タンポポ色の髪に、つばの広いぼうしをかぶっていたの。
まるで羽のようなオレンジ色のきものをきて、
手に、銀かざりのある小さな黒い棒をもっていたの。」
「旅行者かだれかじゃなかったのかい？」
わたしにも旅行者なんかじゃないことはわかっていましたが、なにかいわずにいられなかったのです。
「でも、旅行者が棒をまわしてきえることができる？」と、ニナはおどろいて聞きかえしました。

わたしは、それいじょう聞きませんでした。
ちょうどよいことに、かぎ屋の友だちがいたのを思いだしたので、その夜、黒い塔にしのびこむことにしました。
とびらは、おそろしい音をたててあき、なかからしめった空気とほこりのにおいが、ぷーんとはなをつきました。
かぎ屋はほっとして立ちどまり、ちょっととまどったような顔をしていました。
「さあ、あんたにドアをあけてやったから、もう帰るよ。ちょっとしごとがあるんでね。」

わたしは、ま夜中の十一時に、いったいどんなしごとがあるのか聞いてみたい気がしましたが、このしんせつなかぎ屋をこまらせたくありませんでした。かれは、とてもいい人でしたが、ただ、生まれるときに神さまから勇気をもらってくるのをわすれてきたらしいのです。

かぎ屋は帰りました。わたしはやみのなかを進みました。

ギーッと音がしました。

わたしはあわてて、とびらのほうへはしりましたが、とびらはもうしまって、びくともうごきませんでした。

わたしはひとりぼっちで、夜ふけに黒い塔にとじこめられたのです。ただ懐中電燈だけが、やみのなかで、まいごのヒヨコのようにうごいていました。

わたしは勇気をふるいおこしました。まさか一晩じゅう、しまっているとびらのそばに立っているわけにはいきません。わたしは手さぐりで階段をみつけ、そのらせん階段をのぼりはじめました。わたしが一歩一歩のぼってゆくのを、だれかがみているような気がしてなりませんでした。

わたしは、すりへった石段にぶつかりながら二階までのぼると、そこにとびらがありました。

とびらのむこうに、だれかがいるのでしょうか？

きっと、ほこりとクモの巣だけでしょう。
わたしはとってをぎゅっとまわして、とびらをあけました。
すると——
少女がいたのです。机にむかって大きな本になにか書いていました。
ランプの光が、本のページをてらし、そのあかりが、少女の顔をぼんやりてらしていました。
わたしは少女をみました。
ひらいたスイセンの花びらのようなはだでした。
ランのような髪の毛を、せなかまでたらしていました。
つぼめた羽のような銀色のきものをきていました。
机の上の本のそばに、銀かざりのある黒い小さな棒がおいてありました。
これが黒い塔の少女でした。
「おじゃまします。」
そういったきり、あと、なんとつづければいいかわかりませんでした。まさか、ここで少女にあうなんて思ってもいませんでしたから。
けれども、少女はにっこりほほえみかけ、ペンをおいてはなしかけました。
「どうぞおはいりください。もう四百年も、お客さまをおむかえしていませんの。」
「なんですって？」

わたしは、聞きちがえたかと思いました。
「四百年。わたし、あんまり人なかにでないものですから。」
少女は、人をだますようにはみえませんでした。
わたしがだまっていたので、少女はつづけました。
「わたしが、あなたをこの黒い塔におつれしたこと、おこっていらっしゃいませんわね、ね？」
「おつれしたって？」
わたしは、じぶんできたくてやってきたのにと思いました。
「わたしは、あなたがペトルやニナにあうのを知っていますの。ですからあの子たちに、わたしの姿をみせたのです。あなたはきっとがまんできずに、わたしのところにいらっしゃると思っていましたわ。あなた、とっても知りたがりやさんでしょう？」
「わたしを知っていらっしゃるんですか？」
「わたし、町じゅう知っていますわ。」
少女はほんとうに、人をだますようにはみえませんでした。けれど、わたしは生まれてこのかた、こんな少女にあったことはなかったのです。
「わたしだって町じゅう知っていますよ。だけど、わたしはあなたに一度もあったことはないはずですが……。」と、わたしはいいました。
すると、こんなことがおこりました。

少女は机の上の銀かざりのある小さな黒い棒をとって、三回まわすと、なにか、じゅもんをとなえました。——そして、きえてしまったのです。わたしは、からっぽのいすの前に立っていたのでした。

わたしには、もう、ただゆめかまぼろしか、わかりませんでした。と、少女の声が聞こえました。

「あなたにわたしがみえなくても、わたしには、あなたがよくみえること、おわかりになって？」

わたしはうなずきました。すると、机のむこうに、ふたたび少女がすわって、ひらいた本のそばに棒をおきました。

わたしがいままで書いた物語のなかには、信じられないできごとがたくさんあります。けれども、だれかが、目のまえできえたりあらわれたりするのを、じぶんの目でみたことは一度もありません。

「この棒は？」と、わたしが聞くのをさえぎって、少女はいいました。

「棒のことより、どうして、わたしがあなたとはなしたがっているか、おわかりになります？」

「どうしてって？」

わたしはいきをとめました。少女はまた、わたしの話をさえぎっていいました。

「あなたは子どものために、本を書いていらっしゃいますね。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com